

—ぎこちない身体—

長年、美術教師として教鞭を執ってきた岩崎孝にとって、生涯をとおして重要なモチーフとなったのは、常に身近に存在した生徒たちであった。岩崎を惹きつけたのは、若い生命力に溢れた生き生きとした姿よりも、10代特有の不安や自分自身と葛藤し苦悩する姿であった。一瞬垣間見える憂鬱な表情や不安定でぎこちない動作の中に、自分を持て余すようなデリケートな内面の現れを見逃すことはなかった。

岩崎の作品に現れる「ぎこちない身体」にはいくつかの特徴的なものがある。試験に臨む不安やプレッシャーから、机に突っ伏すような姿は頻繁に描かれ、《放課後（ひとり）》（1977年）のような写実的な表現から、その身体が溶け出すように抽象化され輪郭すら曖昧となった《解けない》（1987年）や、1992年以降繰り返し描かれた《試される者》（1992年頃）、さらに2019年に絶筆となった未完成の作品にも同様のモチーフが見られ、自分の内面と向き合い苦悩する姿を終生描き続けた。また、《話し合う四人》（1982年）や《二人の間》（1999年）のように、複数の人間の間での関係性が、他者との微妙な距離感や指先の細部の仕草や後ろ姿のシルエットに現れている。いずれも、しなやかで柔らかい体の動きとぎこちなく不安定なポーズが、流動的で定まらない危うさの中で、崩れそうな心身のバランスをようやく保っ

ている女子高校生たちの深層を描き出している。

岡田利規主宰の演劇ユニット、チェルフィッチュの演者たちの所作にも「ぎこちない身体」が見られる。代表作「三月の5日間」は、所謂、演劇的とされてきたセリフや身振りを排し、現実的な表現を追求することで、現代を生きる若者の抱くとらえどころのないリアリティを描き出し高い評価を得た。独特の要領を得ないセリフや落ち着かない動作には、デフォルメされた過剰さすら感じたが、その後、街で注意深く若者たちの所作に目を向けると、巷にいかにもチェルフィッチュ的な言葉や仕草が溢れているのかを目の当たりにした。

同様に一見すると不自然に見える、岩崎の描いた「ぎこちない身体」は、日々女子高校生たちを凝視していた岩崎にとっては、日常において目の前にある自然であったのではないだろうか。岩崎は女子高校生たちを描くことを通して、人間そのものを見つめ、そして自らに向き合い続けたのである。



岩崎孝《二人の間》 1999年
photo 木暮伸也



チェルフィッチュ「3月の5日間」
©Toru Yokota（横田徹）